

日本ザル幼児の

保育ノートから

(つづき)

浅見千鶴子

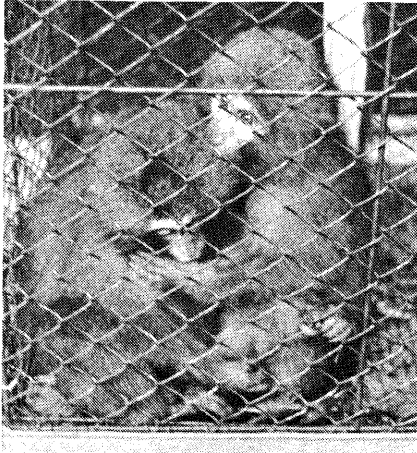


写真 1

指しゃぶり

指しゃぶりをする子どもは人工哺育で哺乳ビンで育てられたものが多いといわれるが、サルの赤ん坊でもそのように、自然の中で母親の乳をのんで育った幼児ザルにはほとんど指しゃぶりが現われないが、母親から離して哺乳ビンで育てると大ていの赤ん坊ザルは指をしゃぶり出す。哺乳ビンは自然の母親の乳首に比べてミルクの出がずっとよいために、ふつうなら長い時間かかって、必要量の乳をとるのに、哺乳ビンでは短い時間でのみ切ってしまう。吸う活動自体が赤ん坊にとって快い体験を与える活動なので、満腹でも吸いたい要求が強くと、乳首の代りに指を吸うようになるのだと説明されている。自然の母子関係を見ると、生まれてしばらくの間はほとんど赤ん坊は母親の胸に抱かれ、乳がでていても、出なくても、大てい赤ん坊は乳首に吸いついているようである。人工哺乳では自分の指がまさに母親の乳首の代理なのである。吸う指は前肢の指ばかりでなく、後肢の指であることも多い。そして拇指のほかに二指、三指のこともあるが、これは少ない。大てい指を吸いながら眠る。強い習性がついてしまうと、退屈な

とき、不安なとき、あるいは眠くなるときはいつでもチューチュー指をばげしく吸う。そして、この癖がつくと、吸われる指の先が白くふやけてしまうほどである。二歳ぐらゐまでこの指しゃぶりは顕著に続くが、それ以後はいつの間にか消えてしまうようである。

私の育てたサルの子の中には指しゃぶりはしないが、自分の腕を吸ったり、相手の耳をしゃぶったりするものがあった。これはイク子とフク子という二頭を一緒にして育てた対飼育によるものだったが、念の入ったことに、眠くなるとお互いに抱き合つて、イク子はフク子の耳をしゃぶり、自分の指をフク子の口に入れ、しゃぶらせながら眠るのだった。(写真1)

表出行動——声と表情

私は前年、サルの赤ん坊のうぶ声をきいた。ある真夏の昼、大学の屋上の実験室で仕事をしていると急にけたたましい「ギャツ、ギャツ、ギャツ……」と大きなばげしい泣き声が出た。けんかでもしたのだからかとび出してみると、出産があつたばかりで、小さな黒い毛の赤ん坊ザルが血液のたまりの中にひっくり返つて手足をバタバタさせ泣

き叫んでいて、そばに母親になつたオトメが立っていた。

これがサルのうぶ声であつた。その後も赤ん坊は抱きついていた母親の体からはがされる度に、このような激しい泣き声をあげた。母の胸に抱きつくと途端に静かになる。オトメは生後一カ月ごろから私が育てたメスザルで、このとき初めて五歳で出産したのだった。母親のないサルは、初めての自分の子どもを育てられないとハーローはいつているが、オトメはどうやら育てることは育てたが、最初の日から、すがりつく子どもを無理にはがして泣き叫ぶのに離れて眺めたり、背をのばして乳を吸わせない姿勢をしたり、いわゆる育児拒否的行動をよくとつた。その度に赤ん坊はギャー、ギャー、泣き立てた。夕方、実験室にいるとよくけたたましい泣き声をきき、出てみると大いオトメが赤ん坊を泣かせているのだった。しかし私たちが近づくとそれまで放して泣かせていたのにす早く赤ん坊を抱き上げて、向う側へ逃げていく、このようにして育つた子どもはかなりの強い性格のサルになつていった。

おどろいたときや、何かちよつと気にいらなるときはキツ、キツと短い鋭い声を出す。同時に体をバネ仕掛のようにピクピクとはねるように動かす。生まれた日から母

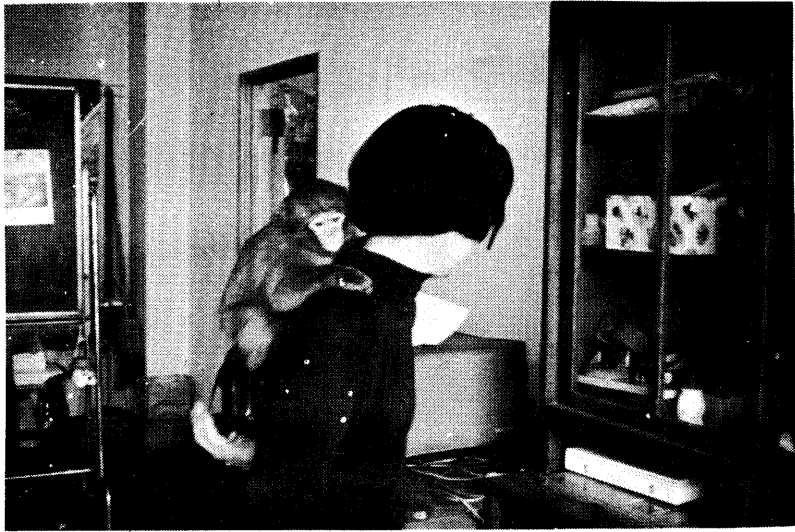


写真 2 甘え

ザルの胸の中で赤ん坊はキッキツとのけぞるように上半身をはねさせてむずかっていた。一種の怒りの表出のようである。不安なときや、空腹のときはかん高く、「キヤーツ、キヤーツ」と大声で泣き立てる。私はザルの赤ん坊をモンキーセンターからつれてきてしばらくの間、哺乳のために毎日バスケットに入れて大学と家とを往復したが、ときどき電車の中でキヤーツ、キヤーツと泣き立てられて閉口した。

目覚めていて機嫌のよいときはピューといった声やクルルという声を出す。満足の表出らしい。何か興味を感じるややわらかなエツ、エツという声をあげて近よってくる。名前を呼んでやるとやはりエツという声で返事をする。長い間ひとりぼっちに放っておかれた後、そばにいつて愛撫してやるとグッ、グッ、グッとさもたまらなかつたように鼻をならしてよろこびを示す。こんなときケージから出して抱いてやると、胸に顔を埋めて、しばらくの間感きわまつたような声を出して体をこすりつけてくるのが常である。親しいものが見当たらなかつたりするとホーという高い澄んだ声を出す。小さな口を円くつぼめてなく、哀愁にみちた声である。母親がいなくて淋しいときにホー、ホー、と

泣いて呼ぶのだが、いかにも悲しそうな顔つきである。

ケージから出して自由に遊ばせた後、またケージに戻そうとつかまえて入れるとき、いやがって抵抗し、ギャー、ギャー泣き声をあげる。このギャーッギャーッという泣き声は成長するにつれてますますひどくなり、自分の要求を通す手段に使うようになった。オトメは好きな食物などほしいものがあるのになかなかもらえないと、急にギャーッと泣き出す。こちらはあわててはしがるものを与えてしまう。手に入れた途端にケロツと泣きやむ。一種のおどかしの手段となった。

サル表情には怒りや恐れははっきりあらわれるが、よろこびや悲しみは人間のように分化していない。しかし、声の出し方、泣き方によってはつきり知ることができる。笑い声もヒトに特有のようで、チンパンジーなどはくすぐるとハッ、ハッ、ハッと、笑い声に似た呼吸音を示すが、日本ザルではくすぐったがるが、それはキツ、キツ、キツという悲鳴になる。怒ったときの表情は独特である。ひたいの毛がスーと後にたなびき、眼をカッと開いてにらみさえ、口を前につき出し、くちびるを平たくして、グワツ、グワツといった怒声をあげる。相手を威嚇するとき眼を

いからし、口を大きく開ける。こうすると奥にある犬歯

(牙) が示される。相手が弱いとこんな表情を示されるだけて一ぺんに恐れて恭順の態度をとることになる。恐れ表情もサル世界には大切である。鼻柱にしわをよせくちびるを大きく開き歯をむき出し、ギツ、ギツとかギャー、ギャーとかけたたましい泣き声をあげ、多くの場合顔を相手に向けながらうずくまる姿勢をとる。けんかをして負けるによくこのような表情と姿勢をして、降参の印とする。

群のリーダーはつねにしっぽをピンとあげてあたりをへいげいし、とり縮り行動をとっている。しっぽを上げているか下げているかで、そのサルの優位度の表示となる。自分より強い相手の前になると大たいしっぽを下げてしまう。このように群生活の中では、上げられたしっぽが力とか優位性のシンボルになっている。幼い私のサルたちはこのような群のルールは知らないのであるが、怒ったとき、威嚇するときはいつでもしっぽをピンとあげた。彼らを初めて、屋上の大きなサルたちを飼っているケージの前に連れていったとき、こわいもの知らずで、小さな彼がしっぽをピンとあげてうなり声をあげながら猛然と大きいサルに向かつて攻撃しかけていった。もつとも、格子を隔てた対面であ

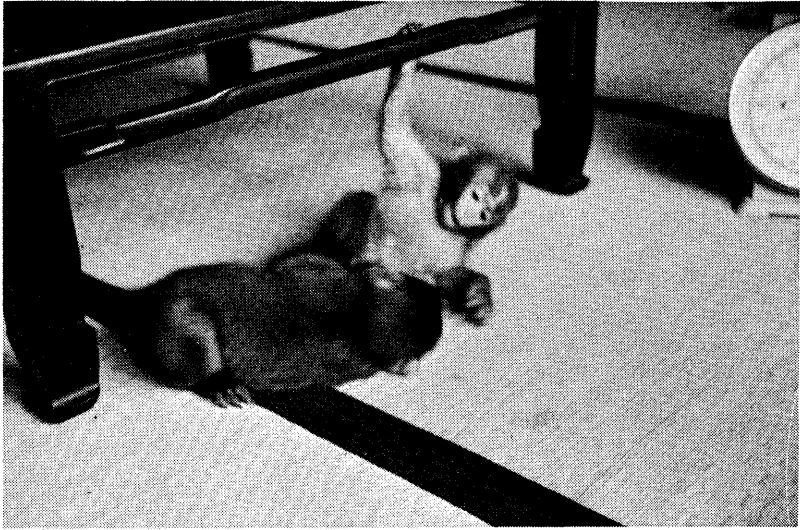


写真 3 仲間遊び

り、それがなければ、一たまりもなくやられてしまうところであつたろう。一般に動物は、こわがるものに対しては本能的に攻撃行動が誘発されるものである。しっぽを立てて、独特の威嚇の表情をして、猛然と向かってくるときは若いサルでもなかなかのすご味があり、気の弱い女子学生が、こんな彼におどかされて逃げまわつたものだった。

遊び行動

イヌもネコも幼い間はよく遊ぶ。しかし、おとなになるとほとんど遊び行動は見られなくなる。その点サルも同じである。おとなのサルは群の中では食べたり、眠ったり、けんかしたりする他はグルーミングをし合うくらいで遊ぶような行動は全く見られない。しかし、子どもたちは実によく遊ぶ。ひとりでも、木によじのぼり、木の枝をゆすつて枝から枝へととび渡り、また地面に下りて、何か見つけると拾って口に入れる。出したり入れたり繰返す。また軟かいものは引きさいたり、ころがしたり、こねたりする。少し大きくなり、二ヵ月ごろから仲間遊びが盛になる。数匹の赤ん坊が集まってめいめい勝手に木の枝によじのぼったり、下りたり、走りまわっている単純な形から、しだい

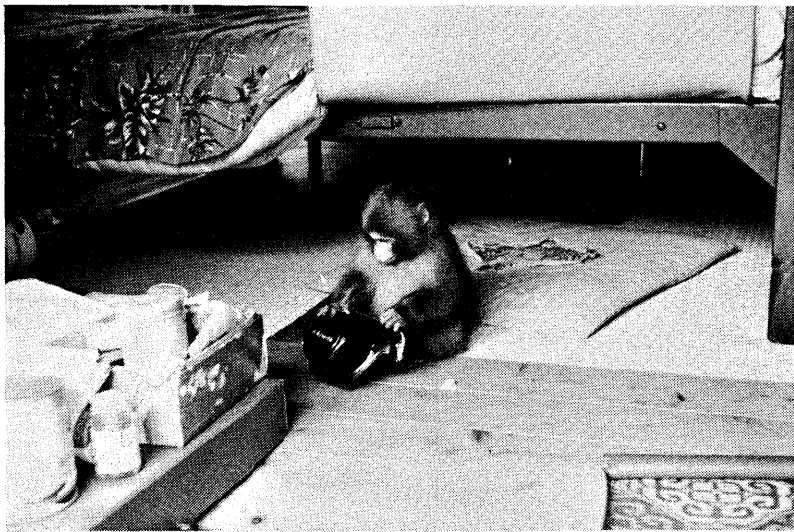


写真 4 ひとり遊び

に手荒なとっ組み合いをするようになり組んぶほぐれつ、追いかけ合い、逃げ合いをやって過ごすようになる。このような闘争ごっこを通して子ザル間のお互いの力量がわかってくる。順位がきまってくるのだといわれる。

保育の間に観察される遊びは環境が限られているために、自然におけるような多彩さは見られない。しかし、初めのころは赤ん坊にとって何でも遊びになりうるのであって、私たちがいろいろな遊びの形を見いだすことができた。サルの子どもの遊びの形を分けると、手でいじくる遊び (manipulation)、口でやる遊び (mouthing)——しゃぶったり、なめたり、かんだり——、および運動遊び——とんだりはねたり、上ったりおりたりとっ組合ったり——の三つに分類できる。もちろんその二つないし三つが重複していたり、連続したりすることもある。また、遊ぶ主体がひとりであるひとり遊びと、相手がある仲間遊びというように分けることもできる。ひとり遊びは早い時期に多く見られ、そばにいたものに無関心で、自分の気のむくままに勝手なことを次から次へとやって遊んでいる。生まれて一ヶ月も経つと自然に赤ん坊たちが大勢集まるようになるが、やっていることは自分の気のむくままの行動で、ヒトの子ども

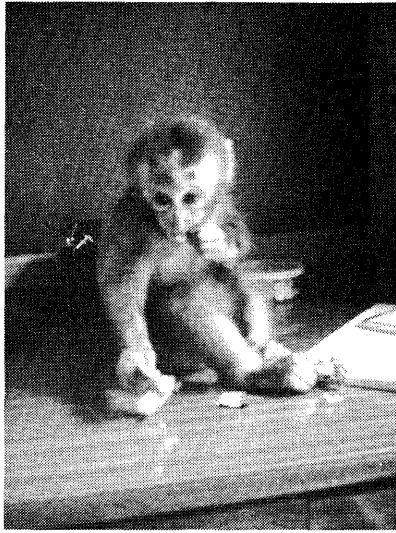


写真 6

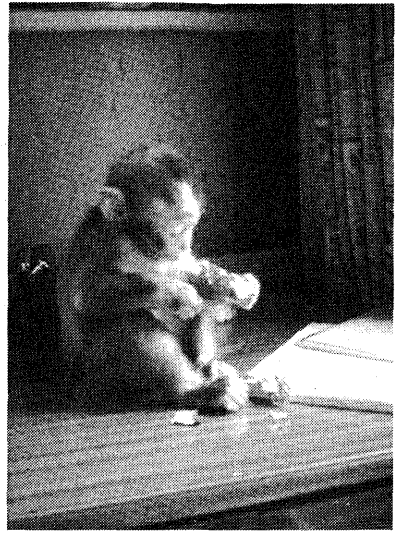


写真 5

の並行遊びの時期に似ている。二ヵ月ごろからお互いの連絡や呼応の下に活潑な遊び活動が展開される。追いかかけたり、とっ組み合ったり縦横無尽の活動である。仲間が与えられないとひとり遊びが長く続く。そしてかなりはげしい運動を伴う遊びになる。

手でいじくる遊びとしては、対象をさわったりころがしたり、こねまわしたり破ったりというような行動パターンがある。硬いものは形が変わることはないが、軟いもの、もろいものはさらに口の運動が加わると目茶々にこわされたり、破かれたりしてしまう。珍らしいものはまず手で触れてみて、安全であることがわかると鼻をもっていつてかいてみてから拾って口に入れる。大きくて口に入らないとしゃぶったり、なめたりという行動になる。口に入れられると軟いものはたちまちにかみくだかれる。硬い石ころなどは口に入れたり、出してみたり、ほお袋に入れたりしばらく大事そうに扱われるが、そのうちにあきると捨てられ見向きもされなくなる。紙や布は手と口で、またたく間にひきさかれ、口の中に入れられてクチャクチャにかみくだかれる。幼い子どもがチューインガムを楽しむようにときどき口から引き出して眺めてまた口の中に入れる。



写真 8 モンジロースタイル

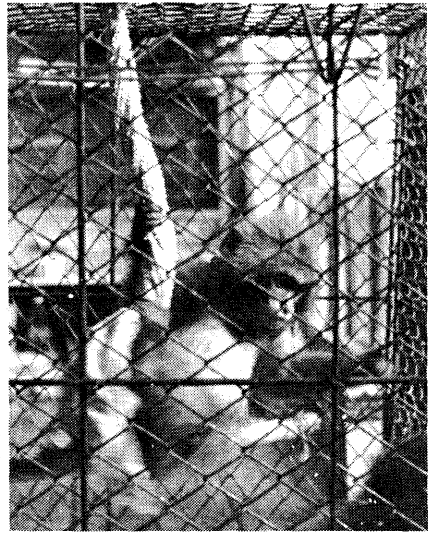


写真 7 タオルで遊ぶ

抱きついて安定感を与えるためのものとして、ケージの天井にタオルを吊り下げてやると、それは住人たちのよい遊びの道具にもなる。それを片手で持ってメリーゴーランドのように回って遊んだり、頭に被ってみたり、もとのところを口でくわえて、手足を放してバタバタさせたり、個体によってそれぞれ好きな遊び方をした。彼らはやってみておもしろいと感じると、繰返して遊ぶのである。フク子は輪ゴムをもらうと、それを両手で拵げて頭からくぐって遊んだ、イク子はスプーンを手に入れると柄の方をくわえて、体の方を手でピンピンはねて音を出してよろこんでいた。アズサは楊子のような細長い小枝状のものが好きで、それを口にくわえながらとびまわった。それを見て私たちはモンジロースタイルとはやしたものである。

こんなに幼い間はよく遊ぶのに、大体三歳を過ぎると遊び行動はあらわれない。お互いの間にちよつとしたいさかや闘争はよくあるが、そうでないときはねそべっているかグルーミングに余念がない。遊びを卒業して彼等には生きるための厳しい試練が待っているのである。

(お茶の水女子大学)